

## 2016 年度学院留学 研究成果概要

種別:学院留学(長期)

所属・職・氏名:法学部 教授 上田和彦

研究課題:フランス現代思想の諸問題の淵源の研究

留学先:フランス・リヨン フランス国立科学研究センター(ローヌ・アルプ支部)リヨン第2大学

### 研究成果概要

フランス大革命によってフランスに民主政が成立するさい、立法者たちは反対者を肅正する「恐怖政治」を行う一方で、「最高存在の祭典」を組織し、宗教的なものに依拠することによって、主権者となる「人民」を創出しようとした。民主主義が創設されるさいに、なぜ一方では、共同体の純化が、なぜ他方では、人民を超越する者の宗教的な権威が必要になったのか。この現象は、フランス革命以来、一九世紀、二〇世紀のいくつかの革命のさいに、純化のかたちや、超越者のかたちが変わるにせよ、繰り返し現れる。この現象を考察するためには、啓蒙と革命期の思想家や政治家の宗教思想と政治思想に目を向け、人民主権という理念がはらんでいる諸問題を検討する必要がある。そのために、フランス・リヨンの啓蒙思想研究者たちからなる研究グループに入り、研究会に定期的に参加し研究を進めた。以下、研究成果の要点を述べる。

「恐怖政治」を正当化する論理はロベスピエールの次の演説に見ることができる。「平時における人民による政体の原動力が徳であるなら、革命時における人民による政体の原動力は徳と同時に恐怖である。徳、それがなければ恐怖は不吉である。恐怖、それがなければ徳は無力である。恐怖とは、すばやく、厳しい、揺るぎない正義にほかならない。ゆえに、恐怖は徳の発露である。それは特殊な原理というよりも、祖国のこのうえなく切迫した必要に適用される、民主政の一般的原理の一帰結にほかならない。」(*Œuvres de Maximilien Robespierre*, t. X, Société des études robespierristes, 2011, p. 357) 注目すべきは、「恐怖は徳の発露である」という断定である。この断定を導くのは、「恐怖とは、すばやく、厳しい、揺るぎない正義にほかならない」という考え方である。では、なぜ「恐怖」は「正義にほかならない」と言えるのか。「正義」が「恐怖」となるのは、「正義」が裁くからである。では、なぜそれゆえに、「恐怖は徳の発露である」と言えるのか。それは、「徳」とはそもそも「正義」を目指しているという考え方が前提になっているからだ。「徳」が目指す「正義」を基準として裁く。それゆえ、その裁きがどのように恐ろしいものであっても、その恐怖は「民主政の一般的原理の帰結」として正当化されるのである。それでは、正義の裁きが恐れさせるのは、どのような人々か。「徳」が目指す「正義」にそぐわないあらゆる存在である。それはロベスピエールが反革命容疑者として言及している「寛容派」や「超革命派」の人々だけに限らない。革命が目指す「正義の君臨」の手前に留まってしまう者、その先まで進んでしまう者すべてである。しかも、実現すべき正義とは何かを知らないという言い訳もきかない。なぜなら、「正義の諸法といえ、大理石や石のうえにではなく、すべての人間の心のうちに、それらを忘れていた奴隷やそれらを否定する暴君の心のうちにさえ刻み込まれている」(*ibid.*, p. 352) のだから。ということは、個々人が自分の心を覗き込みながら、自分の情念が公共の利益のほうへ導かれているかを点検しなければならない。それは際限のない作業となる。そうであるならば、恐怖を覚えないでいる人がどれだけいるだろうか。「恐怖政治」によって実際に裁かれ、処刑された者の数は限られている。しかし、「次は自分が」と恐れなくていられただろうか。「恐怖政治」は、限定された「自由の敵」を肅清するだけのものではない。あらゆる市民の心を個人的利益から公共の利益に向け変えさせる陶冶の装置と結果的になるのである。

この方向においてこそ、「恐怖政治」のまっただなかで、なぜ「最高存在の祭典」が行われたかを考える必要がある。「最高存在の祭典」を行う案をロベスピエールが国民公会に提示するのが一七九四年五月七日、舉行されるのが六月八日のことだ。すでに「超

革命派」の指導者が三月二四日に、「寛容派」の指導者が四月四日に粛清されている。彼らは、断頭台に送られるまで多くの市民たちを惹きつける政治的指導者であったし、処刑された後も彼らの死は悼まれていた。国の祭典は、「恐怖政治」によって断ち切られた社会的紐帯を、もう一度結び直すために企画されたと言うことはできよう。しかしそれだけでは満足しないで、次の点を付け加えておきたい。祭典の要となるのは、「再生」という「道徳的で政治的な動機」のもとに集まった市民たちが、お互いを見つめることである。この祭典では舞台上で何か教訓的な見世物が上演されて観客が学ぶのではなく、観客自身がお互いの姿を見せ合っ、お互いに見つめることそれ自体によって「より良きものになる」。なぜなら、「再生」という動機に促されれば、市民たちのそれぞれが、お互いに気に入られようとして、有徳な人物になるように心を傾け、生まれ変わろうとする姿をお互いに目にすることによって、お互いを好きになれる。徳を高めようとする市民たちは喜びとともに相手を見つめ合っ、「甘美な兄弟愛の絆」が生まれる。ロベスピエールは、市民たちがともに再生へと向かう姿を互いに見ることによって、道徳的な快感とでも言えるものが生じることを期待しているのである。「最高存在」の祭典は、人々が喜びながら、悪しき情念と私的関心を否定して、徳と公共の利益のほうへ心に向け変える形式を準備するものであった。この形式は、「恐怖政治」に見出すことのできる心の陶冶の形式と合致する。「恐怖政治」によって怯えさせながら人々を悪徳から遠ざけ、祭典によって喜ばせながら、人々を徳へと近づける。目標は同じである。悪徳へと傾いた人々は罰し、徳へと傾くように人々を鼓舞するこの政治は、いずれの方向も際限がない。どこまで悪徳に傾いたら罰されるのか、どのような徳を示し続けたら「市民」として認められるかが分からない。「共和国」の敷居はこのうえなく高いのである。

「恐怖政治」も「最高存在の祭典」も、共和国が革命の状態にある、すなわち政体がいまだに確立されていない非常事態時に実行された。革命の状態にあるという現状認識に基づいて、革命政府と例外的司法は正当化された。問題は、革命をいつまで続けなければならないかだ。「革命とは、自由の敵に対する、自由の戦争である」とロベスピエールは言った。「自由の戦争」はどこまで続けなければならないのか。フランス革命は、人民が自由を求めて始まった。王権を停止することによって、人民はたしかに、旧体制の鉄鎖からは自由になった。しかしロベスピエールは、自由になった人民に向けて、なおも「自由の戦争」の続行を呼びかけた。人民はどのように自由になるように求められたのか。「自由と平等を平和に享受すること」ができる日まで、「正義が君臨する」日まで、革命政府は個々人の「市民的自由」よりも「公的自由」に専心するとロベスピエールは言った。「公的自由」とは何のことだったのか。重視されたのは、私的利益よりも公的利益を優先される「徳」であった。個々人の外に存在する権威からの解放という意味での自由は、もはや問題となっていない。重要になるのは、個々人の内に存在する「自由の敵」、すなわち私的情念、私的関心から解放されることである。そのような解放は、いまここにいる「私」の在り方を否定することができるという「自由」によってしか成し遂げられない。この「自由」、自己を乗り越える能力によってこそ、他の人々と共に平等と「市民的自由」を平和に享受することのできる空間は開く。人々が思い描いていた自由とは、たいていの場合、憲法によって護られる個々人の「市民的自由」だろう。しかし、「市民的自由」だけでは解決できない問題が残ったのである。立法者たちは、人知を超えた神への宗教的な感情に頼って徳を基礎づけようとしたが、それは、市民的義務の履行を市民たちに促し、それによって正義を行き渡らせるためであった。はたして人民は、神に頼らずとも、自らの主権によって「正義が君臨する」国家を創設することができるのか。創設できていない限り、時がどれだけ経っても、場所が変わっても、人民主権を求める人々は革命を続行するように呼びかけられ、自己陶冶が求められる。たしかに「恐怖政治」も「最高存在の祭典」も危険な陶冶の形式であり、似たような形式が差し出された際には警戒しなければならない。しかし、陶冶の要請それ自体は正当である。人間には自らの在り方を否定することができる能力がある。この「自由」に基づいて、どのように「私」を否定し、「私たち」の空間を開くか。「恐怖政治」と「最高存在の祭典」が過去のものとなっても、この問題は残り続ける。